



会員 長竹 信幸

悩める新人弁護士

はじめに

有泉弁護士から今回のエッセイを引き継いだわけだが、弁護士になってわずか4ヶ月（この原稿を書いている1月の時点）の自分に書くようなことがあるのだろうか、という不安がないわけではない。しかし、新人弁護士がどういう悩みを持っているのか、ということを書くことにも意味があるかもしれないし、何年後かに自分自身が読み返してみても、初心を思い出すためのきっかけになるかもしれないと思い、今考えていることをそのまま書いてみることにする。ただ、自分が書いたものを読み返すことって、けっこう苦痛である。その苦痛は、提出した訴状や準備書面を読み返したときなどに経験済みである。

判断力の重要性

辞書によると、判断力という言葉の定義はこうなっている。「判断力＝物事を正しく認識し、評価する能力」。この4ヶ月、様々な場面で専門家としての判断を迫られる経験をし、この能力の重要性を何度も痛感した。

まず、「物事を正しく認識」することが難しい。依頼者から相談を受ける際など、必要な事実を十分に聞き出すことが難しい上、必要なか不要なのか分からない事実も出てくる。加えて、事実だけでなく、感情も当然出てくる。何とか依頼者のためにとと思って聞いていても、「正しい認識」からはどんどん遠ざかっていく感覚に襲われることもある。

次に、事実を揃えたとして、今度はそれをどう「評価」し、どういう判断を下すのか。よく言われるよう

に、「木を見て森を見ず」では当然ダメなのであろうが、「森」を意識しすぎると、今度は「木」を見落としている気がして不安になる。

さらに、以上によって下した判断を依頼者に説明しなければならない。自分としては、依頼者にとってどうすることが一番良いのか、という観点から、客観的に判断を下し、それを丁寧に説明しているつもりだ。しかし、依頼者には、「もっと自分の大変な状況を理解して欲しい、共感して欲しい」という気持ちもあるようで、正論だけでは依頼者の気持ちは掴めない、ということを実感する。このあたりのバランスは非常に悩ましい。

今後の抱負

このように判断に迷う状況にはよく直面する。また、判断を下した後も、これでよかったのだろうかと思悩むこともあり、その度に胃が痛くなる思いである。最近はずいぶん腰も痛い。その一方で、事務所の先輩方が手際よく仕事をしているのを見ると、自分も何年後かにはこういう風になれるのだろうかと思不安になる。しかし、悩み続けることでこそ、弁護士として成長していけるのではないかとも思う。何年後かに、この原稿を読み返してみても、「自分も少しは成長できているな」と実感できれば嬉しい。そのためにはまず、「LIBRA3月号」を紛失することなくしっかり保管することから始めなければならない。弁護士には、判断する力だけでなく、書類を整理する力も必要らしいから。わずか4ヶ月で机の上に書類が散乱している私には、それもまた大きな試練である。